

ワルラスとイスナール - もうひとつのフランスの伝統

Walras and Isnard: Another French Tradition

御崎加代子 (滋賀大学)

Kayoko MISAKI (Shiga University)

はじめに

A.N.イスナールの主著『富論 (*Traité des richesses*)』(1781) は、同時代人からはほとんど評価をうけなかったが、商品の交換価値を方程式によって数学的に表現した部分が、刊行後ほぼ100年たってから、ワルラスやジェヴォンズの注意をひきつけた。そのことがきっかけになって、20世紀の研究者たちは、イスナールを数理経済学者の先駆者として位置づけるようになった。さらにジャッフェが、ワルラスの一般均衡理論へのイスナールの影響を主張するようになり、イスナールは一般均衡理論の先駆者としても、評価を受けるようになった。

本報告は、このような解釈とは少し違った方向で、イスナールとワルラスとの関係を検討し、イスナールの経済思想の意義と、ワルラスの一般均衡理論の思想的起源に新しい光を投げかけることを目的としている。かつてシュンペーターは、一般均衡モデルの理論的形成史としての「フランスの伝統」を語ったが、それとは違った「伝統」をこの二人の関係に見出すのが本報告のねらいである。

(1) イスナール研究史

イスナールの『富論』が、1878年にワルラスとジェヴォンズによって注目されるまで、この著作は、フィジオクラート批判の書として言及されても、その数学的部分が脚光をあびることはなかった。(たとえば、コックラン編『経済学辞典』(1845)におけるJ.A.Blankin 執筆によるイスナールの項目や McCulloch, J.R.(1845)など)。20世紀に入ると、Renevier, L.(1909)が、唯一の本格的なイスナールの体系的研究書となるが、そこにおいても、数学的方程式の部分が特に重視されているわけではない。ジャッフェは、このような研究方向に批判的で、イスナールを一般均衡理論の先駆者として位置づけようとした(Jaffé, 1969)が、このようなジャッフェの解釈には、疑問も提出されている(Klotz 1994)。しかし概して、イスナールを数理経済学の先駆者として位置づける解釈は、20世紀を通じて定着した(Theocharis(1961)など)。これによって、フィジオクラート批判という、イスナールの経済学の本来の意図は、忘れられてしまったかのように思われる。

(2) フィジオクラート批判としてのイスナール『富論』

イスナールは、もともとエンジニア・エコノミストであった。彼の経済学はたしかに、土木学校で培った数学の能力なしには成立しなかったであろうが、その着想自体

は、エンジニア・エコノミストの伝統の中に位置づけられるものでもなく、デュピュイのように他のエンジニアに影響を与えた形跡もない。著作の多くは、フィジオクラートの影響をうけ、当時のフランスの税制度や貨幣制度の改革、風紀の改善といったものがテーマとなっている。彼の経済学を検討するにあたっては、フランス大革命という激動の社会背景、彼自身の社会改革プランなどを十分に考慮する必要がある。

主著『富論』も、1770年頃から交流がはじまったフィジオクラートの影響下で書かれたものであり、19世紀の研究者たちが、イスナールの『富論』に言及するとき、それはフィジオクラート批判の書としてであったことから明らかなように、その交換方程式も本来はその文脈で理解されるべきである。イスナールが意図したのは、農業部門だけが生産的であるというフィジオクラートの命題とそれを根拠にした土地単一税を否定し、新しい経済理論と税制度を提言することであった。剰余の源泉をすべての部門に一般化し、すべての部門において費用を上回る収入に税をかけることによって、公正で中立かつシンプルな税制度を実現することが彼の目標であった。最近の研究（van den Berg 2006）では、イスナールの経済理論が逆にフィジオクラートから影響を受けている部分が明らかにされている。彼のアプローチは、フィジオクラートと同様に価値、再生産、剰余を出発点にしており、「経済表」と同じく、循環的で社会的なモデルを構築しようとしている。イスナールがたてた多数商品の交換方程式は、たしかに新しいスタイルではあるが、1760-70年代のフランスにおいては、かなり洗練された価値論争がすでになされており、イスナールはそこから着想を得たというのがvan den Bergの解釈である。交換価値は内在的なものではなく、相互依存的、相対的なものであることを発見したのはイスナールだと一般的には信じられてきたが、そもそも当時のフランスにおいてはイギリスとはちがって、交換価値の決定要因を労働などの一元的要素に求めようとするという方向性は存在しなかった。それはフィジオクラートにおいても同様である。イスナールは、このようなフランスの価値論の特徴に、新しい形式を与えた人物だったともいえる。

（3）『富論』の意図

イスナールの『富論』のそもそもの意図は、社会契約説を否定して、社会の維持に必要な法が、人間の意志や社会における結合以前存在することを主張し、その法の内容を明らかにすることであった。このような彼のアプローチには、フィジオクラートの自然的秩序論と多くの共通点を見出すことができる。しかしすでに述べたように、イスナールは、土地からのみ富が生まれるとする彼らの主張を真っ向から否定する。もし土地が富の唯一の源泉であれば、すべてのものを社会の成員間で平等に分配すればよい、というのが彼の主張である。（当然のことながら、彼はフィジオクラートの主張する専制君主制にも反対である。）

イスナールによれば、富はインダストリィによってのみ増産可能であるという事実が、このような単純な社会の存立を不可能にする。人は最小の労働と最小の費用で、最大限のものを享受しようとするという傾向を持ち始めるからである。土地が生み出す富、インダストリィが生み出す富がどのように価値を獲得し、交換されるのか、そ

れを明らかにするのが『富論』の大きなねらいである。

イスナールは、『富論』において、労働の価値決定についても言及し、それが商品の価値とおなじ法則に従うことを主張する。同質の労働についての単純なケースのみ言及しているだけであるが、たしかにこのような議論は、ワルラスの純粋経済学における生産用役市場におけるアプローチと、多くの共通点を見出すことができる。

(3) ワルラスへの影響

ワルラスが一般均衡理論を構築する際に、イスナールの方程式に影響を受けたか否かについては、実はジャッフェも認めているとおり、明白な証拠はない。ジャッフェの言うように、ワルラスの蔵書には、このイスナールの『富論』が含まれるので、この著書の存在を、自らの純粋経済学に取りかかる以前から知っていた可能性はある。現在ローザンヌ大学が所蔵しているワルラスの蔵書（ワルラス文庫）を直接確認したが、イスナールの『富論』には、方程式が展開されている頁も含めて、一切書き込みがなく、非常に保存状態がよかった。他の蔵書と比較して、ワルラスが『富論』に一生懸命とりくんだという形跡を感じ取ることはできなかった。あるいは、『富論』は、父オーギュストの蔵書であったものを単に受け継いだだけという可能性もある。

ところで、ワルラスがイスナールに直接言及したのは、ジェヴォンズと一緒に数理経済学の先駆者たちのリストを作成した際(1878)のみである。父オーギュストの文献にも、イスナールへの直接的な言及はない。しかし土地国有化とそれに伴う税制の撤廃を主張したオーギュストは、フィジオクラートの土地単一税を高く評価していた。このオーギュストとの主張は、レオン・ワルラスの社会経済学として結実した。またレオンは様々な著作において経済科学の創設者、自由競争の提唱者としてのフィジオクラートに言及し、自らの純粋経済学の先駆者として賛美している。

このようにフィジオクラートを軸とすれば、イスナールとワルラス父子との間に、多くの知られざる思想的リンクが浮かび上がることになる。このリンクを様々な観点から検討し、ワルラスの純粋経済学（一般均衡理論）の新たな思想的起源をあきらかにすると同時に、フランスの革命前後の思想の意義を、イスナールをてがかりに示すことが本報告の目標である。

(注)文献一覧とフルペーパーは、当日配布する予定です。